

---

# ブラック\*ガーデン

紫乃 華陽

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ブラック＊ガーデン

### 【Nコード】

N7119X

### 【作者名】

紫乃 華陽

### 【あらすじ】

いつもと同じ、

いつも通り、

極普通の高校生活・・・

「……どこだ？」

目が覚めたら知らない所にいるし・・・

「我ら秘密組織・・・」

何言ってんだよ？

人気女優にいつも通りの平凡な毎日を奪われるなんて思いもしなかった。

これから繰り出されるのは、

なんとまあ滑稽な、変な秘密組織との悲惨な日常。

それに耐えられるかは俺の気力次第である。

## いつも通り（前書き）

ギャグを入れたつもりですが、ギャグセンスは全く無いです。男ばかりが登場してきます。恋愛の表現も少々あります。あまり好みではないという方はご退場願います。

いつも通り

「ふああ．．．。」

窓の外を見て欠伸を一つ。

目の前の答案用紙は裏返しにしてある。

そう、今は退屈で眠いテストの時間なのだ。

学年で五位という結構上位を誇る桜野優喜さくらの ゆうきにとって、テストとは暇つぶしの他何でもなかった。

授業中の70％は覚えているため点数はかなり良い。

キンコンカンコン．．．

チャイムと同時にテストが回収された。

「んー．．．。」

大きく伸びをする。

周囲からは「どうだった?」「五番の問題さー．．．」などと聞こえてくる。

やはり人と自分を比べたがる者が多い。

くだらない。

優喜は溜め息をつく。

「どうしたー? 優等生。」

からかうようにやってきたのは

クラスメイト兼親友の成田大介<sup>なりただいすけ</sup>だった。

彼とは小一からの幼馴染で離れようとしても離れられない存在だった。

つまりは腐れ縁だ。

「いや、退屈だなーと思って。飯買いに行こうぜ。」

「おう。今日こそは焼きそばパン食うぞ・・・。」

と毎日言いながら一度も焼きそばパンを手に入れる事すら出来ていないのだ。

大介の学習能力の無さには呆れて物も言えないが、それでも優喜より優秀だ。

一応優喜もその部分は懂れている。

「ただ・・・何か少し惜しいんだよな・・・。」

「ん？何が？」

「・・・何でもない。」

思っていた事を悟られないように誤魔化した。

たまにとても勘が鋭い時があるため、友人達は彼の前では変な事を考えないように気をつけている。

「あーちくしょー・・・今日も売り切れてやがる・・・。何で焼きそばパンはこんなに人気が高いんだよ！！」

と一人で怒っている。

優喜は苦笑し、ジャム＆マーガリン付きのコッペパンを手を取った。

「それ美味しいの？」

「食ったことねーの？結構美味いよ。おばちゃん、これください。」

「あいよ120円ね。毎度ありがとうね。」

と営業スマイル。

「・・・ふうん。おばあちゃん、俺もこれ。」

「あいよー。ありがとうね。焼きそばパンはまた挑戦しにおいで。」

あつはつはつと明るく笑うおばあちゃんに大介は苦笑とピースを贈る。

それにしても優喜は少し驚いていた。

身近に感じても実は遠いというのもある。

同じ庶民派の食いもんなのに・・・。

とか思ってしまった。

「何か面白えことねーかなあー・・・。」

とコッペパンを頬張りながら大介は呟いた。

「面白い事な・・・。」

屋上に吹いてくるそよ風が二人の髪を撫でる。

ほぼいつも通りの変わらない毎日にも少し変化が欲しい、  
と思わないはずも無かった。

「ワンセグでも見るか」

大介はケータイのワンセグを開き「笑っていいかも!!」という番組のチャンネルをつけた。

「お！アンジュちゃん出てんじゃん!!」

「アンジュ？あの最近はやりのモデルか？」

「おう。可愛いよなアンジュちゃん。男に大人気らしい。」

「そりゃそうだろうな。」

ケータイを覗き込むと茶髪で顔がとても整っている女性が最初に目に入った。

「へえ・・・あんま見たことねえこど、やっぱりモデルって人並み外れた顔してんのな。」

「・・・それ褒めてんの？」

「ん？ああ、一応。」

大介は優喜を一瞬睨んだが、  
すぐにケータイの画面の方に視線を戻した。

『それではまた今度お会いしましょう。』

エンディングが流れて終わってしまった。

「あー！ほら、お前のせいで終わっちゃったじゃねえかよ！」

優喜の胸倉を掴み、

今度は本気で睨んだ。

「し、知らねえよ……。大体残り五分くらいで終わる予定だったし……。」

キンコンカンコン……

ナイス！！ この時昼休み終了のチャイムが優喜には救世主に思えたのだった。

「はあ……。疲れた。少し部屋にでも寄ってくかな……。」

十字路を曲がった途端、

どんと人にぶつかるようなおとがした。

状況がよく読み取れず、

優喜はそのまま尻餅をついてしまった。



## 袋の鼠

聞こえるのは誰かの足音。

病院の中にいるかのように思わせるつんとする消毒薬のにおい。

体を動かそうとしても何故か動かすことが出来ない。

どこだ？・・・ここ。俺はどんな状況にいるんだ？

優喜は重い目蓋をゆっくりと開いた。

「お目覚めかな？」

目の前に居るのはアンジュに似た茶髪の男だった。

男は満面の笑みで優喜の顔を覗いた。

「ここは？・・・てか、誰ですか？」

警戒している目で目の前の男を睨む。

「えー・・・さっきまで君の目の前にいた女だよ。」

女？・・・アンジュ？

どういう事だ？

「混乱しているようだね。俺があの人気モデル、アンジュだよ。」

・・・え？・・・は？

理解は早かったが、その事実を受け入れるのに数分かった。

「つまり、貴方とアンジュさんは同一人物、という事なんですね？」

男はコクリと頷いた。

「飲み込みが早いね。因みに俺の本名は宮本<sup>みやもと</sup>穂。こっちが本当の俺。」

相変わらず笑みを絶やさない彼に優喜は少し苛立ちを覚えた。

人を縛っておいて何々だこの男は。

再び睨む。

「桜野優喜君・・・だよね？」

「！！・・・何で俺の名前・・・。」

名前を教えたつもりは無いのに当てられてしまった事に驚きを隠せ

ない。

穂はあるファイルを優喜の前に出した。  
優喜はそのファイルをじっと見た。

そしてあまりの恐ろしさに絶句した。

「こ……れは……」

背中に流れる汗は冷たかった。

そのファイルに記されていたのは、  
優喜の個人情報。

顔写真をも記載されていた。

「どこでそんな物……。」

「それは企業秘密　とまあ、君に協力して欲しいことがあるんだよね。」

穂がパチンと指を鳴らすと部屋が明るくなった。

だが、まだ部屋が暗く思えたのは、  
優喜と穂の周りを囲ってるSPのせいだった。

「やっぱり君達居ると暗いね。」

「申し訳ありません、穂様。」

無表情で謝るSP達。

声も揃っていて凄いというより恐ろしいと言いたい所だった。

「な、何でSP?!」

優喜は少し遅れたリアクション。

「説明してあげてよ。」

「我らは秘密組織『ブラックガーデン』の頭領、みやもとこころ宮本 悟様の子である宮本穂様の護衛だ。何か質問はあるか。」

大有りですよ!!!

「大体ブラックガーデンって何ですか!?!何の秘密組織なんですか?!」

優喜は自分が何を言っているか正直分からなくなってきた。

「スパイだよ。芸能もあるけど、その他にもライバル会社の情報とかそんなのを集めてる。」

「……。」

優喜の脳裏に嫌な予感が走った。  
恐る恐る訊ねる。

「オレに……何をしろと?」

そう言つと穂はその質問を待っていたかのように、にんまりした。

「よくぞ聞いてくれました。」

何だよ……。

「優喜君、君には」

聞きたくない。

だが縛られていて耳を塞げない。

「我が秘密組織『ブラックガーデン』に入ってもらつ。よつて……

」

やめろ……それ以上言うな……。

「君に我が組織の仕事を手伝ってもらつ。」

優喜は目つきを変え穂を睨み、

「犯罪は手伝いません。」

そつ、相手の情報を許可無く盗む事は犯罪に等しい。  
真面目すぎる彼には当然の選択だった。

だが穂は一向に表情を変えず、  
往生際が悪いように言った。

「犯罪とは人聞きが悪いなあ。ライバルを調べ上げるのは当然の事だろ？」

優喜はぎりつと歯を食い縛った。

「もし、手伝ってくれないのなら・・・君の大事な人達にまで危害が及ぶよ？」

「そんな！卑怯ですよ！！」

「卑怯も何も、君が手伝ってくれば済む話だよ？」

周りを囲んでたSPの二人がファイルを何冊か持ってきた。

優喜はぎよつとした。

そのファイルは、優喜の両親、姉、妹、そして友人達のデータが保存されたものだった。

「さて、どうする？君が手伝えばこの人達に危険なマネはしないよ。」

「

冷静で冷酷な穂に対し、

優喜は汗を流すだけだった。

流石にそう言われると、

いくら優喜でも抵抗できない。

「・・・わかりましたよ。」

「いい子。」

穂はまたにっこり笑った。

## 入団手続き

穂は優喜の前に契約書を用意した。

まずはこの書類。

会員No. 7842536

名前：桜野 優喜

フリガナ：サクラノ ユウキ

年齢：17歳 高校二年生

性別：男 誕生日：5月5日

血液型：A型

住所： 市 番地 丁目

特技：ゲーム 趣味：読書

苦手：暗い所

頭は結構よく、学年で5位。  
運動神経は抜群。  
現在一人暮らし。



ここにブラックガーデンに  
入団する事を証します。

責任者名

「さ、ここにサインして。」

「・・・はい。」

「その次はこれを読んでね。」

契約条件

1・「ブラックガーデン」とは  
秘密組織であるために、  
外部にこの情報を漏らしてはならない。

2・団員は頭領に従い、頭領と頭領の身内に  
逆らってはならない。

3・与えられた仕事は無理が無い限りやる事。

4・特別団員以外は恋愛を避けること。  
(仕事の邪魔になるため)

5・団員は何でも出来るようにしなければならない。

e t c . . .

「質問はあるかい？」

「沢山有ります。」

「時間をかけてゆっくり話していこう。まず、条件に対しては？」

「そうですね・・・。」

優喜はまた契約条件を見つめた。

「俺は特別団員に入るんですか？」

「ゲストみたいなものだからね。君は特別団員だよ。」

特別団員だとしたらもう少し優遇な扱いしてくれてもいいのではと  
優喜は言おうとしたが、やめた。

「他に質問は？」

「団員は何でもって・・・。」

「ああ、家事的なものだよ。」

言い終える前に答えてしまった。

「他は？」

「・・・もう今日は疲れたので、じっくり聞くのはまた次の機会  
いいですか？」

「ああ、いいよ。家まで車で送らせるよ。お休み。」

「・・・お休みなさい。」

夢だと思いたい

「・・・変な夢を見たな。」

目覚めが悪い朝。

変な夢を見たせいかもしれない。

学校に行つて忘れよう・・・。

部屋を出た時、現実を叩きつけられた。

「おはよう」

食卓には夢・・・いや、昨日見た男が笑顔で座っていた。  
どうやら夢だと思わせてくれないようだ。

「どうして貴方がここにいますか！」

「やっぱり一人暮らしとなると部屋も狭いんだねえ。」

男は俺の話を見殺し、部屋を歩き回った。

「・・・質素な部屋だね。」

「放つとして下さい。」

イライラしながら朝飯を作る。

「何作ってるの？」

「・・・。」

「ん、家族写真？」

「勝手に見ないで下さい、宮本さん。」

段々腹が立ってきた。

「穂でいいよ。可愛いじゃん、小さい頃。」  
何を言ってるんだこの男は。

「穂さん、もう一度訊きます。何で俺の家にいるんですか。」  
相変わらず部屋物を見物しながら穂さんは言った。

「決まってるだろ？新入団員を調査しに来たんだよ。」

「俺の事もいろいろ知ってるんじゃないんですか？」

出来た朝ご飯を食卓に置く。

無難に白米、味噌汁、焼き魚だ。

「勘違いしないでくれ。ある程度のことは解ってるけれど、日常生活を監視なんてできないだろ？そんなストーリーカーみたいな事。」

「普通にやってそうですけどね。」

「言うじゃない。」

この人の相手は他の誰よりも疲れる。

それだけは断言できる。

「あの後、ご飯は食べた？」

「おかげ様であの後の記憶はすっかり消えてますよ。」

穂さんはあははと笑う。

挑発しているのかとまたイラッとしてしまった。

本当にあの子の事は覚えていない。

おそらく食事風呂も入ったのだろう。

昨日の残り物らしきおかずが冷蔵庫に入っていたし、風呂のタオルはまだ濡れていた。

「これから学校？」

「当然です。」

一々変な事を訊かれると本当に変質者と思ってしまう。

「今日課外授業とか言って学校に乗り込んでおうかな。」

彼は愉しそうに笑っているが、

俺はちつとも愉しくない。

学校に来たらめちゃくちゃになりそうだ。

いい対応の仕方はこうだろう。

「やめて下さい。」

そう言うともた穂さんは大笑いした。

笑い事ではない。

真面目にやめて欲しい。

「もしも本当に来たらどうする？」

笑いながら言う。

「仮病で早退します。」

「君らしいね。」

本当に愉しそうだ。

本当に来ない事を祈ろう……。

## 課外授業

「はよ。」

大介はいつも通り少しへらへらした挨拶をする。

俺は昨日の事で疲れて、声も満足に出せない。そのため挨拶する気にもなれず、大介を一瞬見ただけで自分の席へ向かった。あまり重くない鞆を机の横にかけ、そのまま机に突っ伏した。

「どうした？・・・顔色も悪いな。風邪か？」

「・・・多分な・・・。」

大介はこういうときだけは優しい。本当に。

血色の悪い俺を見て、ポケットから何かを取り出した。

キャラメルだった。

「甘いもんは疲れた時にいいんだぞ。」

「・・・俺、甘党じゃない。」

「いいから、ちよっとした時に食っとけ。んじゃ、席戻るから。」

「・・・おう。」

キンコンカンコン・・・

「ホームルームを始めるぞー。席に着いてない奴早く着けー。」

担任の水嶋先生<sup>みずしま</sup>、通称ずっしーのでかい声がいつもより小さく聞こえたのは、俺が疲れていて睡魔に負けそうになっていたからだ。

この後、一々四時限目までとともに授業を受けられなかったのは言うまでも無い。

昼休みは本当に天国のようだった。

飯を食った後は、保健室で休ませてもらい5時限目の途中から授業

にでた。

おかげで午後の授業を受ける体力は回復したようだ。

五時限目は何故か校長が来ていた。

噂によるとこれから課外授業らしい。

滅多に無いことなので、何となく楽しみにしていた。

だが『課外授業』と言う言葉で思い出してしまった。

『今日課外授業とか言って学校に乗り込んでおうかな。』

朝のあの人の言葉だ。

来る可能性は十分有り得る。

そうわかっていても、来ないで欲しいと思う一方だった。

朝「即早退します」と言ってしまったが、

よくよく考えると彼・・・いや、彼女といった方が良いか。

アンジュが折角来てくれたということでクラス全員から大ブーイングを受けるに違いない。

昼休み早退しておけば・・・

後悔先に立たずと言うのは本当だな・・・。

でもまあ、まだ来るとは聞いていないので課外授業の詳細を聞こう。

「芸能界で活躍している人気女優、アンジュさんがいらっしやっています。」

そう思った直後ですか。

これはキツイ・・・。

体力というより、精神力の限界である。

とりあえずは知らないフリをしておこう。  
どうせ向こうも俺に構ってる暇などないだろう。  
うちのクラスは大半が男子なのだから・・・。  
それが不幸中の幸いだ。

やがて彼女が教室の中に入って来た。  
ピンクのフリル付きとラメ入のワンピースという格好だった。  
髪型は横でポニーテールをしている。

彼女の格好にクラスの男子は興奮気味だ。  
少数数の女子は、彼氏がいれば怒り、嫉妬していた。  
だが、女子の殆どがミーハーなため女子の視線もアンジュの方に向  
いていた。

「こんにちわ。今日はね、芸能界について色々教えようと思って、  
校長先生にお願いして来させていただきました。」  
「ここに笑顔と甘い女性らしい声で生徒を魅了させてしまった。（  
どこから出してるんだ）  
ドアからは多数の別のクラスの男子がアンジュを見ようと押し合っ  
て見ている。」

「うふ。皆さんご存知の通り私はモデル、女優などをやっています。  
」  
「何がうふ、だ。俺は溜め息を吐いた。  
女の毛皮を被った獣だとも知らずに、クラスメイト達はただただア  
ンジュにでれっでれなのだ。」

「じゃあ、早速だけど皆さんにクイズをするから当てて頂戴ね  
え。」



とまたにつこり。

「モデルってねえ、雑誌の専属モデルっていう言葉をよく聞くけど、実際にモデル個人がデザイナーとか出版社と契約することは全く無いの。さて、何故でしょう？その君、答えてくれる？」  
クラスの生徒も廊下にいる生徒も俺の方に視線を向ける。

このタイミングで指名するなよ！！

よく見れば男子生徒の視線は憎しみと嫉妬が籠っていた。あの大介  
さえも俺を横目で睨む。

・・・答えるしかないだろう。

「全てはマネージメント会社を通しての契約となるからです。」  
すると彼女はまたにつこり笑い、

「ふふ。正解よ。頭良いのね。」

俺は苦笑した。俺が答え終えるとすぐさまクラスメイト達の視線は  
アンジユの方へ戻った。

仕方なく授業が終わるまで大人しく待つことにした。

だが、それまでにクラスの男子を当ててもしも違ったら俺に答えさ  
せてくる。

そのため、男子生徒からは喧嘩を売るような目で見られた。ブーイ  
ングの嵐も巻き起こった。

その度にアンジユあの人は嬉しそうに笑うのだ。

どこまで俺を陥れるつもりなのかは知らないが、俺は無視しざるを  
得なかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7119x/>

---

ブラック\*ガーデン

2011年11月10日19時40分発行